

SYOHEI ニュース 令和8年6月号

奥州市総合水沢病院の概況

所在地 奥州市水沢大手町3丁目1番地
TEL 0197-25-3833、FAX 0197-25-3832
URL <http://mizhsp-iwate.jp/>

E-mail mizubyou@city.oshu.iwate.jp

診療開始年月日 昭和26年5月28日

標榜科 内科・外科・泌尿器科・整形外科・
神経内科・循環器内科・精神科・麻酔科・小
児科・耳鼻いんこう科

許可病床数 一般 95床 (運用病床)
感染症 4床 **総数99床**

看護の体系 急性期一般病棟入院基本料10:1

診療職員数(R8.4.1現在)

職種	正規	正規以外
医師	13	4.46
薬剤師	3	0
看護師	72	15.26
その他の技術職員	29	25.6
事務職員	14	15.75
その他	7	8.63
総数	138	69.7

主な設備の概要：医科

MR I (1.5 テスラ)・マ
ルチスライスCT (320
列)・骨塩量測定装置・
心エコー・循環器用デジ
タルX線装置・自動生
化学分析装置・マンモグラ
フィー(デジタル)



勤務医師(常勤医) 13名

職名	医師名
院長兼健診センター長	遊佐 透
副院長兼診療部長兼泌尿器科長兼薬剤科長	尾形 昌哉
副院長兼整形外科長兼リハビリテーション 技術科長	中村 聡
医療技術部長兼内科長兼糖尿病代謝科長	仲地 紀勝
診療部副部長兼外科長	塚本 信和
耳鼻いんこう科長兼栄養科長	高橋 邦明
小児科長兼放射線科長	村上 洋一
精神科長	青木 京子
臨床工学技術科長兼内科医長	藤巻 大亮
臨床検査科長兼内科医長	久慈 貴法
神経内科医長	佐藤 一輝
内科医師	小木田 勇馬
内科医師	浅利 寛喜

保健福祉活動

事業所健診、人間ドック、定期健康診断、特定健診(国保)、骨粗鬆症等各種検診、小児生活習慣病予防検診

総合水沢病院を紹介します

総合水沢病院長 遊佐 透

奥州市総合水沢病院を紹介します。奥州市は岩手県の県南に位置する人口約10万5000人余りの市です。岩手県内では盛岡市に次ぐ第2位の人口規模で、2006年に5つの市町村が合併して誕生し、今年で満20年になりました。



市立の医療機関は2病院3診療所があります。当院は健診・検診や医療だけでなく、保健・介護・福祉との連携などの実践を通して、「市民の健康を支える面倒見のいい病院」を目指している地域密着型の病院です。

昨今の医療を取り巻く環境は、ますます厳しくなっています。人件費の上昇や物価の高騰などの財政的な問題だけでなく、働き方改革や将来の生産年齢人口の減少など、医療スタッフの確保も課題とされています。

その様な状況にあっても、人が地域で生活する限り、医療・保健・介護・福祉は必要不可欠な分野です。自治体病院は、それぞれの地域で「頼りになる病院」であり続けるために、医療ニーズの変化を把握し、それに合わせて変革を進めて行く必要があります。

当院も県立病院や民間の病院・診療所、高齢者施設、行政等と連携し、地域包括ケアシステムの一翼を担う病院として、これからも職員一同が一丸となって努力していく所存です。

大谷翔平選手の成績ボード (R8.5.27現在)

打者 試合54 打率270 本塁打8 打点29 盗塁6
投手 試合8 防御率0.73 勝利4 敗戦2 奪三振54
5/5 3・4月ナ・リーグ月間最優秀投手賞を初受賞

『SYOHEI ニュース』は市医師養成事業関係者の情報紙です。
令和8年5月28日発行 奥州市医療局医師確保推進室
〒023-0053 奥州市水沢大手町3-1 TEL0197-25-3833
市医療局HPにバックナンバーを掲載しています。 第74号

ボランティア精神を貫いた医師「及川栄(おいかわ さかえ)」(1857年～1932年)

1896年(明治29年)6月15日(旧暦の5月5日)、明治三陸大津波が発生した。ところによつては40㍎近くの高さの大波が襲い、岩手県を中心に、2万2千人にのぼる死者を出した。

この大惨事に、献身的な医療活動を行ったのが奥州市江刺岩谷堂の外科医 及川栄である。

その大惨事は、午後7時32分頃、ゆるやかな地震(長周期地震で震度2か3)から始まった。5分程にも及び長い地震だったが、大きな揺れではなかったため津波を心配する人は少なかった。

初めの揺れから1時間程の後、突然の轟音とともに大津波が襲来し、端午の節句の祝い事で団欒中の家庭を大波は呑み込んだ。何度も大波は押し寄せ、沿岸の多くの家庭は全壊した。

傷病者を救うはずの地元の医師もまた、津波に飲まれ、救いの手は他に頼るしかない状況であった。



三陸大津波による被害の様子

岩谷堂の及川栄医師がこの報を知ったのは、2日後の17日の朝であった。日赤の正社員としても活動し、外科医が天職と思っていた栄は、すぐさま救援に向かおうと、ありったけの薬品と機器を準備し、そして手配の済んだ18日夜、大きな被害を受けていると思われる気仙郡へ、馬に乗り向かう。(気仙郡は、現大船渡市：江刺から大船渡までは48里・192^キ余の道のりは、間に姥石峠や白石峠の難所があり、加えて九十九曲がりの険しい山道)。

気仙郡盛町(現・大船渡市盛町)に着いたのは、20日の午前9時。直ぐに警察と役所に行き、無償で救援したいと申し出た。そして、最も被害の大きい綾里村(現・大船渡市三陸町)へ行くこととなった。綾里村へ到着したのは20日の午後4時。到着してすぐさま治療を始めたが、この日治療できたのは6名であった。(※ 明治三陸大津波での綾里村の津波遡上高は38.2㍎、ビルの11階相当になります。)

傷病者の傷が多数に渡っていたためと、何より傷病者が各地に散らばっていたためである。早速、栄は、傷病者を2か所に集約するよう要請した(長林寺と民家の家屋)。

その後、各地から救援のために医師が続々と駆け付けた。その医師に栄は、「比較的浅い傷であっても、汚泥を飲み、呼吸器や消化器に障害を負っている、また、多くの患者は、家族や住む家を失い心にも大きな傷を負っていることを考えて欲しい。」という意味の説明をした。目の前の患者一人ひとりの状況だけをみて治療を行うことを強く話した。

栄は寝食を惜しんで、連日朝から夜中の12時まで治療活動を行った。多くの医師が治療活動に見切りをつけて帰っていく中、栄は7月22日まで残り治療にあたった。実に1か月以上もこの地で治療を続けたことになる。

この献身的な救援活動にあたった栄の日記に記されている言葉がある。

「私が治療を終え、赤十字社より日当旅費として小切手が送られてきたがお返しした。隣町の仲間への愛というか、自分の中に湧いた激情にも似た感情により何かの役に立とうとしたのです。被害を受けた人々が、家を失い、家族を失い、自ら傷つき、血だらけの体で涙を流しながら語った災害の模様を忘れることはできない。私は、このお金をその被害者に与え、たとえわずかであっても、彼らを守ることに使って欲しい。」

「ボランティア精神」という言葉を普通に耳にする現在であるが、百年以上も前に、この精神を貫いた及川栄という一人の人間が私たちの郷土に存在したことをいつまでも記憶しておきたい。